

《座談会》

出席者（ABC順）

女子大学教授 有賀のゆり

中学校教諭 本宮 啓

大学文学部教授 大下 尚一

高等学校教諭 高橋 勘

女子中・高教諭 都間 豁

（司 会） 小野 高治

（大学経済学部教授）

## 同志社の一貫教育

小野 本日お集りいただいたのは、同志社の一貫教育についてご意見を伺いたいという趣旨でございますが、時あたかも同志社創立第二世紀に入り、今後の同志社がどうあるべきかを考えますときに、やはり一貫教育の問題は極めて重要な核になるわけでござい

ます。昨年十一月に新しく就任されました上野総長も、校長会段階での取り組みを検討しておられるようですが、それに呼応いたしまして、現場で直接教育を担当していら

っしゃる各学校の先生方のご意見をとりあげてみたいと、この座談会を企画したわけでございます。もちろん各学校を代表した資格というのではなく、個人的なご意見で結構でございますので腹藏なくお話し下さいませ。

最近、よく「総論あつて各論なし」という言葉が使われるのでございますが、一貫教育というテーマもとすれば総論だけで終わってしまいがちで、この座談会の場合もそうなる危険がございますが、たとえそうであつても、今後もっと煮つめてゆく材料になれば幸

いと存じます。

それでは最初に高橋先生から、一貫教育について日頃お考えになっていることを伺いたいと存じます。

### 一貫教育の問題点

高橋 私は同志社にまいりました昭和十三年から現在まで、一貫教育ということをはじ

ょうに大切な問題として考えてまいりました。戦前には一貫教育ということばはあまり

使われませんでして、戦後になりましてから盛んに使われるようになり、十数年前から、なお活発に検討されるようになりました。

戦前と戦後のいちばん大きな違いは、戦前には学内無試験推薦というものがなく、試験があったわけです。戦後は無試験になってきたんですが、やはり無試験になってからのほうがよりよい成果を挙げていると私は思っております。

今から十五、六年前の昭和三十六年二月に「第一回学内教育研究会」が組合で計画され、一貫教育を正面に掲げて、組織的に研究を始めたのが私の記憶ではいちばん大きな動きだったと思います。同じその年の四月に、一貫教育研究会というのが総長のもとで出発しました。それから、数年前ですが、



大下 尚一氏

宮井先生を筆頭にしまして、十数人の方が意見を『同志社時報』に発表なさったのを覚えております。組合はいまでも教育研究会を続け、去年も一貫教育を取り上げました。そういう経過の中で、組合を除いて一貫教育が総論で終わってしまつて、具体的に実らなかつたということを残念に思っております。そこで、今日を機会に、総論は総論として、具体的な方策を打ち出していくということが大切じゃないか、と思います。

さて、この一貫教育について、私は次のように考えております。

一貫教育にも教育理念というものがあつて、それを土台にして、受ける立場にある学生、生徒、つまり主体である学生、生徒と、それを受けさせる、守っていく、責任をもつ教師

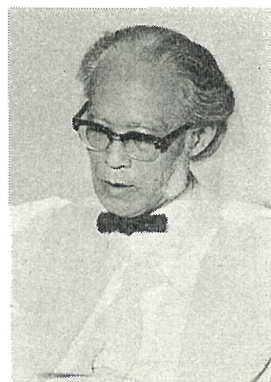


有賀のゆり氏

の一貫、それを支える教育行政と、こんな分け方を前から考えています。

教育の理念というものは、元来、象徴的な言葉でしかあらわされません。みんないろいろな意見があつて、これを一致させるというのはもともと困難なことです。新島精神とか、キリスト教精神とか、又は同志社精神という言葉でおき換えているのでございまして、その最大公約数を言葉で示すということには、なかなかむづかしいことと思います。

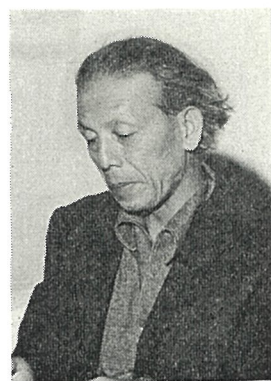
しかし、これを受ける側、主体である学生、生徒側にとって、教育とは何かということとは、ある程度具体性をおびてこなくてはならないわけでございまして、私は「学ぶとは真実を胸に刻み、教えるとは希望とともに語る」ということと思います。そういうものを生き生きと守つてやるというのが一貫教育の、いまいちばん大切な理念だと思います。ですから、推薦の数のこともあるでしょうけれど、それを守るわれわれ教師陣の一貫性を具体的に進めていくことと、それを支える行政というものを真面目に追究していかななくてはならないのじゃないかと思つておるわけでございます。



高橋 勘氏

学生、生徒が、その人でないと持っていないものを引き出してやることでございますが、その引き出す力も彼ら自身が持つておるというのをいつでも確認しながら出発しております。先生が引き出してやるのかというのには、一貫教育とはずれるんじゃないかと。彼らが持つておるものを彼らが出すわけで、われわれは、それを邪魔するものを除いてやるという立場が大切じゃないかと考えるわけです。

こういう教育のなかで、いちばん大切なものは信頼関係でございます、信頼というのは条件をつけないことであろうと思います。だから大学、中、高、幼稚園、互いに条件をつけるにしても最小限度の条件にとどめながら、キリスト教主義なり新島精神というもの



本宮 啓氏

を生き生きとさせていくということが大切なので、それを怠ってはならないと、まあこんなふうに私は考えております。

こう言いつても抽象論になってしまっています。恐縮でございます。あとで話が出ますが、先般校長会で一貫教育についてたき台をお出しになりましたが、私の考えとはずいぶんずれています。そういうことをお互いに話し合って、実際にわれわれ教職員が、一貫教育を具体的に進め続けていくということが、大切なことではないでしょうか。

小野 理念などと言いますと、どうしても抽象的なならざるを得ないと思いますが、ほかになにか、高橋先生のおっしゃったことについてご意見はないでしょうか。

都部 組合で取り上げた場合は、一貫教育

という場合に、教科内における相互理解というか、カリキュラムの一貫性を検討すべきだということでした。中高ではどういうことをねらいにしておるかということを大学の教員は知らないし、その成果がどういうふうに大学の中に出てきているかは中高のほうは知らない。そういうことも交流をやらないといけないということに焦点があったと思います。

それから、もう一つ、一貫教育と言われるときに、強い色合いを持つてるのは宗教的人格形成ということに対しての教育を一貫してやるべきだという、そういうニュアンスが強く表われている一貫性ということであると思うんです。

もう一つのは、先ほどの高校側が大学側と推薦問題から始めて一貫性という場合に、全員入学というような要求を含めた形で一貫性というふうに言うわけで、大きく分けてその三つぐらいの色合いがあるんじゃないかというふうに思うんですけれども。

小野 一般に一貫教育と申しますときには、なにも私学だけではないに、国民的教育全体の中で語られなければならない分野がこ

ざいますね。たとえば、このほど日教組が教育過程改革案というものをを出しまして、その中で小、中、高という四つの階梯に分けまして、その系統性を追究するということがございました。それに対してさらに文部省のほうでも教育過程審議会ですか、ここでさらに案を出すということでございますけれども、単に小、中、高だけでなしに、大学を含めた教育上の一貫した系統性を追究するということは、私学だけではなしに国民教育全体の立場からもあると思います。

しかしここでその問題を取り上げますとあまりにも問題が広がりすぎますので、私学、とくに同志社に限定して一貫教育の問題をお話し願えたらと思っておりますが、組合で討議されましたのは、まず教科の点で各学校こ



部間 裕氏

との自己完結的なカリキュラムが組まれると同時に、上下の段階の間で一定の系統性がなければならぬということ、それから同志社の特色といたしまして、宗教教育をどうして一貫してやるべきかということ、それから推薦制度に関する問題、さらに学内の人事的交流というものをと積極的に行えないだろうかと、こういった問題が従来挙がっていたと思います。本宮先生、中学なんかで一貫教育の問題が話題になる場合がございますか。

#### 中・高の独自性

本宮 組合で、研究会のときのテーマにいつも挙がります。カリキュラムの面で、高校



小野 高治氏

に入って外部から来た人との比較における色々の問題がうわさ話し程度で、まだ充分な資料に基づく研究とまでは行きません。これは私の個人的な意見ですが、一貫教育のことでカリキュラムのことだけを強調するのは当を得ていないんじゃないかと。むしろ一貫教育の基礎となっている、校祖の精神による一致ということの追究、これを具体的に全学的にやるのが前提であって、その次は各校がやはりこれは独立した完成教育を目指しているわけですから、それが達成できるように協力し合うことが大切だと思います。戦後の公立の学校もいちおう全人教育をうたってますけれども、やはり受験という現実の壁があって、どうしても予備校化とまでは言わないにしても、全人教育というのがお題目に終わりがちでしょう。ところが同志社においては、推薦制度の前提のもとに、各校ごとに理想とする全人教育を目指すことが可能です。だからそういうした全人教育を各校がしっかりと取り組むということが、むしろ同志社における一貫教育のいちばん重要な部分ではないでしょうか。

さきほど高橋先生が言われた相互の信頼関

係ということば、条件をつけないことだというような表現でもおっしゃいましたが、各校がほんとに全人教育に安心して全力投球出来、そして受験という余計なロスをししないで、若い時代を、十分に自己を発揮してやっていけるという学校生活を築くということが同志社における一貫教育のいちばん大きな主眼点じゃないかと思えます。あまり個々の例を言いますと話が長くなりますけれど、香里で十数年前に、中高が一緒のために、中学の生徒会はどうしても高校ベースで独自活動がでにくい、運動会ですべて高校生が中心でやるので、中学はおそもんになりがちであるというので、ある時期に中学の主体性を打ち立てるために、運動会は高校と別にするんだ、生徒会活動もなんとかして独自活動をやらんだということ、よく私の方の中学に見学に来られたことがありますが、やっぱり各校、各校で三年、三年、大学の四年という節を年代にに応じて力いっぱい全人的に活躍の舞台が与えられ、そしてそれに適切な指導が行われることが大切です。その指導には、とくに宗教教育を含めた全人的な活動については、各校だけの取り組みと合わせ

て、全学的な連帯の取り組みによる能率の向上もはかるべきではないでしょうか。一貫教育ということを考える場合に、そういう観点からの横と縦の連絡、協力が、非常に大切なとつねづね思っています。

**小野** 中学校と高校とは、いちばん一貫教育がやりやすいと、われわれ大学のほうからは思えるわけですが、その場合ちょっと不思議に思われるのは、なぜ同志社中学、同志社高校が合併しないんだろうかということですね。この問題はどうでしょうか。

**本宮** ここを卒業した生徒が言いますには、中学は中学で三年間一生懸命やったし、高校は高校でまた大いに鍛えられて有意義であったと、一緒になって六年間よりも、別々に三年間ずつ区切りをつけて一生懸命取り組んできたのは非常によかったと思う、という感想を聞いたことがありますが。教科や経営的な面から言えば一緒のほうがいいのかもしれないませんが、さっき言ったような三年、三年の節をフルに生かす、そして独立の意識を持って、中学の三年生は最上級生としての自覚とプライドを持って下級生をリードする現在のあり方も有意義です。一緒になればなれ

たでまた……。

**小野** もともとは一つだったんですね。それから何年かのときに分かれたわけですね。

**高橋** 私はね、はっきり離れるべきだという主張を昔から持っています。受ける子どもを主体にして考えたときに、中学校の三年生ぐらいまではやはり主体的と言いましても、先生が手をかけてやるほうなんです。大学生は自分で主体的に動いておる。高校生は何とか主体的に考え行動しようとか決断し始める時です。だから中学校と離れて独自で教育すべきだと私は思います。女学校も香里も分かれたほうがいいと思っています。(笑)

戦後の昭和二十二年、旧制同志社中学校は男女共学をめざして女学校と一緒になろうと結婚を申し込んで振られました。そこで、新制中学校と新制高校の合併を考えたのですが、当時の総長、湯浅先生が、対象とする生徒が違う、主体的にまだまだである中学生と、すぐ大人の世界に入っていく高校生とは分けるべきだと言われ、われわれはそのことについて大いに湯浅先生とも議論し、中高分離に賛成したのです。理事会大学側が中高一本になれといわれる理由が私には分からない

のですが、校地の問題が主になっているか、でなかったら高校を大学の予科か、予備校ぐらいに思っておられる論理のように思えます。私は生徒らの肉体的、心理的点から考えて、公立のように分かれている方が、教育的に良いと思っています。ただ、そのとき、一貫教育をどうするか、その中心である教科のことはどうだと言われたら、現在は中学校も高等学校もその点ではまだまだ怠慢で、もっとカリキュラムの研究をしていかなくちやならない。

### 全人教育の目標

大下 さきほどからお話がでている全人教育ということが言われるときに、日本社会の中堅となっていくようなエリートをつくっていくのか、それとも、その生徒が大学に行くのが行くまいが、とにかくいい人間をつくっていくのか、その辺の問題を考える必要があると思いますね。特に学力を重視しなくても、いい人間はあるわけです。全国的に入試が今日のようにきびしい競争状態をひき起こしていなかったときには、この二つの面がわ

りに自然に調和できて、適当にやってこれたかもしれません。現在は中学から大学まで、外から同志社に入ってくるのには、相当の競争があつて、学力がその基準になっているのが現実なんです。その一方で大学の大衆化ということがあつてしょう。高等教育が大衆化するということは、競争がなくなるということにはならないわけです。

そういう傾向の中で、同志社が一つの教育機関として、国民の中のエリートをつくってゐるんだというのか、やはり、よき民衆を育てていくというのか、その辺をもうすこし整理して考えてみると、同志社の一貫教育の具性は出てこないのではないでしょう。これはカリキュラムの問題とも併せて考えられる点ですね。具体的に気持を表現しますと、やはり同志社中学からずっと来たものには、大学に来て、たとえばばぬけて英語のできるような学生がかなりいてほしい。これは大学で教えているもののエゴではないと思うんですけれどもね。そういう面が、いわゆる全人教育論とどう関係するのか、もうすこし考えてみたいと思います。

有賀 先生がたがいろいろおっしゃった中

に、私が言おうと思つていたことがみんな含まれてると思うんですけれども、私も、一貫教育といった場合には、同志社ではまず人間教育だと思つていたんです。いまは全人教育ということばがよく使われるらしいですが、かならずしも宗教的というんじゃないけれど、少なくともキリスト教を基盤とした人間像というんですか、そういうものを持った人間をめざして教育していくことが、同志社のあらゆる教育の根底に一貫してあると思います。もっとも、ある型の人間像をあまり観念的に決めてしまふのはいけないでしょうけれども――。しかも、小さいときからそれぞれの才能を伸ばすことができて、そして大学に行けばまたそれぞれの自分が選ぶ適切な専門のほうに進めるといふような、そういう同志社であつてほしいと思うわけですけれど、現在のところはかならずしもそうじゃないし、それからまたすべての専門が大学に設けられてあるわけでもないんです。いま大下先生がおっしゃいました、同志社はエリートを創つていくのか、善良な民をつくつていくのか、という問題ですが、私はそのどちらとも限定できないように思うんです。でも基

本的には、同志社は善良な、というよりむしろ良心的な「人間」を創ることを第一義としたいです。それとともに、ほんとうにその中で才能のある人は、それが自由に伸ばせるような場でもあってほしいと思うんで、そんなことは理想にすぎないかもしれないんですけれども、それだけのフレキシビリティのある学校としての包容力と構想をそなえたものであってほしいと思います。

小野 そうですね。この全人教育というのは年少のときからすればするほどいいと思うんですが、中学校ではそのために、こういうことをやってらっしゃいますか。

本宮 どういうことをやっているというよりも、やっていることと、やっていないことと両方言いたいと思うんですけどね。まず、大きな一つの反省点は、公費助成にからんで私学も公共の教育機関であるということから、一般性を強調する議論が強くなり、宗教教育も日本国憲法の解釈で、信教の自由に触れない範囲内ということにあまりにも気を遣いすぎておったのじゃないかということとです。これではかえって私学の生命が封じ込められてだめになってしまうのじゃないか

と思います。同志社創立百年の今日、今こそそうした宗教教育の本流を堂々とうち出して、このいちばん若い年代の子どもに対して同志社立学の精神をしっかりと知らしていくべきじゃないかと思います。私どもの学校で、以前に一年生に入ったときに、クラスごとに唐崎ハウスで一泊して、市内の教会の牧師先生に来ていただいて宗教的オリエンテーションなどをやっておったんですけれども、授業が欠けるとかいう理由で、結局夏休みの由良のキャンプということに肩代わりされて、それがなくなつたのですけれども、女子部はいまでもそれをきちんとやっていらっしゃいますし、終礼も礼拝形式で守っておられるようですし、本当に立派だと思います。私たちもほんとの私学の使命と生命を見い出すためには、そこを今一度真剣に考えなければならぬと思います。それから、やはり全人教育で、教科以外に自分の個性を太くに伸ばし得る自由なクラブ活動も大変に大切なものだと思います。これが公立などに比べると伸び伸びと非常に盛んで、よその学校から見学にくる人は目をみはるところなのですが、こういう点はほとんど伸ばすべきだと思いま

す。しかし、私が大変残念に思っていることがあります。例を挙げますと、洛星中、高校がオーケストラを立派に育てており、先日の朝日新聞でも、中、高生のオーケストラとしては唯一のものであるとして、大きく数度、新聞に載っております。同志社中高がこれだけありながら、やれば洛星どころじゃない、すばらしいオーケストラができるわけなんですけれども、中高の協力体制がとれていなかったため、こうした文化財が育たなかったのです。受験校といわれる学校で、あのすばらしいオーケストラが持てて、どうして同志社でそうした花が開けなかったのでしょうか。立派な素質、才能を持った多くの生徒を授かっておりながら、彼らに、活躍する、才能を発揮する場を用意しなかった私たちの責任を痛感しています。この点でも中高一貫教育の体制作りをしなければ本当に申し訳がないと思っています。

高橋 全人教育ということばができましたが、これは非常に象徴的なことばでございまして、観念の中で自分の前に置いておるだけで、非常に感覚的な感じで、何だかわからないです。

ただ、この全人教育に新島精神、キリスト教精神をわれわれが具体的にどう打ち出すかというのが大切なわけで、全人教育の議論はつかし何回聞かされても、それでは進まない。私は数学の教師ですが、教壇に立つことを私の正念場だと思っています。数学には数学の独自の論理があり、美しさがあり、表現法がある。それらを彼らが体得する。他のあらゆる学科も、まさにそのとおりで、その中から人生観なり世界観が生みだされてくる。それを全人教育だと思うのです。だからカリキュラムは、本宮先生は二の次とおっしゃったが、私は全人教育すなわちカリキュラムと違ってよいとさえ考えています。

さきほどエリートの話も出ましたね。私はエリート教育ぐらい悪いものはないと身にしみて自分の学校生活から思います。われわれが全人教育をやるときに、生徒たちが半歩前進しさえしたら、その中から放つといてもエリートは出てくるんだと、これが新島先生の教育方針だと私はおやじから聞かされてきている。国民全体がちょっと進まなければいけない。エリートは出るもんじゃない。だから、おれについて来い、というやり方はいけな

いんだと私は思います。

小野 現在の岩倉の高校では、比較的恵まれた条件の中で全人教育にとりこんでいらっしゃる……。

高橋 とは言えませんが。それよりそんなことをいったら全人教育、何を言ってるんだとやられそうです。数学のきれいな子に手をさしおける、それができずに何が全人教育だ、という答えがかえってきそうに思われます。そんなら数学教育を中高で一生懸命やっておるのかといわれたら、最近少しばかり前進しています、としかいえないのですが、こういうことを学内統一してできないか、カリキュラム研究ぐらいはできるじゃないかと思えます。さきほど大下先生から、英語ができる生徒を大学へよこして下さいといわれたことは多少抵抗を感じるのでございます。人間として大切なものをつかんで、その中から英語も伸びていくし、数学も伸びていくんじゃないかと、こんなふうに私は期待するのでございますがね。

大下 さきほど、英語といったのは、一例としてあげただけです。私は、全人教育というのは、学力とスポーツと徳育と三つに分か

れていて、それぞれまんべんなくやるということではないと思います。スポーツに打ち込む子もいるでしょうし、勉強が好きで勉強をやる子もいる。その中には数学でがんばるものもいるし、英語でがんばるものもいる。それでいいわけです。ただ、徳育が勉強とはなれてあるのではなくて、数学でも国語でも、それを大いに勉強させられることを通して人間が養われる面があるのだということを言いたいわけです。

都岡 大下先生のさきほどのご発言に、エリート教育かよき民衆を育てるのかというご発言がありましたね。それはどうなんでしょう。大学はどういう理念をもって学生を教育しようとしておられるのかお聞きしたいんですけれどね。一貫教育という場合に、自分のところを中心と考えて、その関係のあるところを下を見たり上を見たりして、その限度で話をしますね。ですが、教育というものには、一生の、あるいは女子の場合だったらその次の世代のことも、母親の影響はと思つて、考えているわけです。だから大学を出た人間が一生どういう人間であるのかということに焦点を合わせて、一貫教育ということも

やはり考えなければいけないのじゃないか。

同志社の大学、あるいは大学を出なくても同志社を出た人間が、社会においてどういう生きがいをもって生きているのか、それについて、社会的な評価なり何なりから同志社の教育全体を考えなければならぬ、そういう視点も必要なんじゃないかと思えますけれど。

かつて、クラレの社長が、同志社はいちと言うんです。何がいかと聞いたたら、東大に行つて話をしたら、学生ががやがや騒いでもって、先生方は知らん顔。同志社で話をしたら、大塚先生が学生のところへ行つて、注意されている。ああいうふうに懇切に細かいところまで、総長さえ、まめにやられる、そういう雰囲気というものは同志社ならではの言われることがあるんです。だから、卒業生もそうだというのなら、同志社に対しての一つの社会の評価ですけれど。

**有賀** 私は、全人教育ということの真意をあまりよく知らないのですけれど、どちらかという私はむしろ人間教育ということばのほうが好きなんです。人間教育というのは、人間を尊重する人間をつくるということじゃないかと思えます。個々の人間というもの

は、それぞれみんな違った何かいいものをもっている。その才能を伸ばしていきながら、またまわりのほかの人の特色というか、いいものも認めてあげられるような、そういうふうな人間を育てていくということが、同志社の人間教育の基本になくちゃいけないのではないでしょうか。そういうふうな人間観の基本というのはやはりキリスト教の思想であつて、神様から一人一人みな違ったタレントを与えられていて、それを精いっぱい発揮しなきゃならない使命をそれぞれ与えられているということと、それから私たちはみな神様の子どもであり兄弟姉妹であつて、どんな人にもすばらしい人格があるということを認めることだと思ふんです。そういうふうな人間観を、基本的に人間としてもちながら、しかも専門的な面では非常に何か特色をもった人間が社会に出て何かのお役に立てば、私は同志社としてはいちばんいいんじゃないかと思ふんですけれども。

**高橋** それは大賛成です。

**大下** さっきのエリートのことでちょっと補足しておきたいと思ひます。私はエリートということばを漠然と使いましたんですけれど、

ども、日本では国家が官立大学を通して、上からエリートをつくる役割を果たしてきましたから、とくに私学の立場からみると、エリートという言葉に悪いイメージがあると思います。けれども、民主主義というもののは、一般論ですけれど、民衆の中から国家の中堅になる責任感をもったエリートをつくり出していかねければ成り立たないと思ひます。さきほど高橋先生が、大学では教育はできないんじゃないかという、大衆化の問題をおっしゃいましたが、そのとおりなんです。だからこそ大衆化した大学そのものが、広い意味で国家のエリートをつくつていくという責任をもつて一度自覚する必要があると思ふのです。ですから、私がエリートと言う場合には、なにも東大出の官僚や一流商社マンだけをさしているわけではないのです。国民がエリートを育てるのだという意識が生まれていかないと、民主主義は成功しない。そこに今日の教育問題の一つがあるんじゃないかという気がしますので、こんなことを言ひだしたわけ

**有賀** 結局自覚のある人間というか、自分の真の考えがある人間というか、そういう人

をつくっていかないといけないということですね。

大下 そういうことですね。

高橋 私の過去で受けたエリートという言葉は、自分にとって都合のいい連中ばかり集めようという考えが頭の中にあるものですか。頭のいいことを自慢して、都合のいいときにだけ利用しようとする。でなかったら、主観を第一にして客観をあしげにするエリートで、エリートと聞くだけでいやな気がします。だから先生がおっしゃったような感覚ではないのですが。

有賀 大下先生の言われるような意味では、新島先生だって自分でエリートだと思っ  
ていらしたんですね。どうしても自分が学校を建てて、日本の指導者をつくらなければなら  
ないという意識を強くもっていられたので  
すから。エリートというのは語源からいうと  
選ばれている人という意味でしょ。そういう  
ふうな意味ではたしかに自覚をもっていらし  
たと思うんです。

## 推薦入学制度の理想と現実

小野 理念的な事柄から少し展開してもう  
少し具体的な問題に進んでいきたいと思いま  
すが、一貫教育というものが、本宮先生のこ  
とばで言えば一致教育で、同志社の建学の精  
神にのっとって、みんな一体になって教育す  
ることだということ、それから有賀先生のこ  
とばで言えば、人間をとことん尊重していく  
人間をつくり上げていくためにみな協力す  
るということ、そういうような理念としては  
だれも異論ないだろうと思うんですが、一  
般的にはもっと現実的な側面、つまり中、高  
さらに大学へと進学がエスカレートしてい  
ける推薦入学制度として、父兄は一貫教育を受け  
ようとしていると思います。

現在大学では、高校から推薦制度で上っ  
てくる学生の率というものは、学部によって若  
干違いますが、だいたい一割から一割五分く  
らいで大多数の学生が学外から来ておりま  
す。したがって学内の中高から推薦されて上  
ってきた学生は、一般学生の中に一応埋没し  
た形になっておりますので、一貫教育にどれ  
だけの効果があったのか、はっきりとはわか  
らないわけですが、感覚的にはある程  
度共通のイメージがあります。すなわち、一貫

教育を受けてきた人は、自由で伸び伸びとし  
ているという長所も持っている。社会性、ある  
いは社交性と言ってもいいのですが、協調性  
が豊かで、バランスのとれた良識的な行動を  
するということです。これは慶応大学で一貫  
教育についているような長短を調べた中にもそ  
ういうことが細かく出ておりますけれども、  
同志社でもおそらくあたっているだろうと思  
います。それにたいして短所としては、安易  
な生活態度、刺激の欠除からくる無気力性、  
迫力のなさ、持続力あるいは集中力の欠如、  
こういった欠点がよく言われているわけ  
です。物事にはすべて裏表があるのは当然なわ  
けですけれども、いま申しましたような長短  
というのは、一貫教育に必然的に伴う属性で  
しょうかね。

大下 一つは入試がないとか全人教育を受  
けたとかいろいろあることもあると思うんですけ  
ど、同志社に入ってくる子どもたちの家庭の環境  
がかなり影響があるんじゃないでしょうか。  
こんなこと言い出すと議論にならないかもしれ  
ませんが、現実としては、いいところの坊ち  
ゃんやお嬢さんが来るわけだ。しかも、絶対  
に東大とか京大に入れなくちゃいかんとかん

かんになってゐる親のもとでは育っていないような子が多いでしょう。少し金がかかっても同志社でもいいからまちがいのない子になってほしい。こうした家庭の子弟を、中学からよくもわるくものんびり教育しちゃう。長所も短所もどこまで一貫教育の結果であるのか、私には非常に疑問ですね。

**小野** 女子大では女子中学から上ってくる人に比べて何か違いがございますか。

**有賀** 下からくる人と外からくる人とは非常に違います。私が担当しているのは音楽のほうだけです。英文とか家政のことはわかりませんけれども。音楽に関してだけいえば、いま二五人の定員なんですけれども、そのうち同志社内からは推薦で、今年から制限されて五人しか入れないんですね。二〇パーセントですか、いままではもう少し入ってきた学年もあるし少ない学年もあるんですけども。ご存じとは思いますが、音楽の学校というのはこのごろはだんだんこもむつかしくなりまして、早くから受験勉強をして、普通の勉強なんかはほったらかしにして音楽ばかり毎日練習をしたような人しかなかなか入れなくなってきたんです。困ったことにそ

ういう人たちは概して自己中心的なんです。協調性がない。ともかく競争心が強い。そういう中であって私は同志社の高校から来る学生が好きなんです。人間として、いまおっしゃったように伸び伸びして自由で、そして協調性がある、性格的にバランスがとれているし、けっして利己主義でないんです。いろんなことに、全然自分に得にならないことでも、人のために一生懸命奉仕してくれるわけですね。そういう人がいてくれるから、私は同志社の音楽学科のいい雰囲気を保っていられるんだと思っているわけです。

それからもう一つ長所は、入ったときは同志社の人は程度が比較的低いわけです、専門の技術の面では。ところがあと四年間で非常に伸びる学生が多いのです。必死になって準備して、ある程度のいい技術で入ってきた人が案外伸びないんですね、音楽の意味で。だからそこから辺にやはり人間教育と専門教育との問題があるんじゃないかと思ひましてね。受験教育で中学、高校あたりに一つの目的を目ざして、そればかりに取り組んでいると、たしかに入学試験には成功するけれども、やはりどこかで人間がバランスがとれな

くなってきたでしょう。それに反して、その時代にわりあい伸び伸びさせてもらうと、専門になったときに、個人差はありますけれども、やはりあとで伸びるんじゃないかと思うんです。音楽のように殊に技術が大切な専門の場合にはたいへんむずかしいことなんですけれども、そういう差を私は感じております。それから短所のほうですが、安易な生活態度、無気力、持続性や集中力の欠如、こういうのも下からきた人にはたしかにあるんです、最初は。ですけど、外からきた人がものすごい勢いで勉強する人があるものですから、そういう人に刺激されて、かえって生き返って伸びることもあるわけです。

**小野** 私の経済学部で過去二〇年間にわたって、正確にいいますと、昭和二十七年からですが、一般の学生と推薦の学生との成績を比較したものがございます。それによりまして、成績の平均点に関する限り、非常にはっきりとした傾向が出ております。すなわち三年ころまでは一般受験生のほうが成績がよくて、学内推薦学生のほうが低いという傾向がはっきり出ておりました。したがって、そのころは推薦制に対する批判もかな

り強かったわけですが、その後この関係が完全に逆転し、のみならず、だんだんと格差が開いてきている。つまり内部から上ってくる学生の平均点の方が年々よくなってきているわけなんです。このデーターは全学的には普遍化できないかもしれませんが、ある種の事情を現わしているには思います。もちろん学内高校のご努力が評価されなければならぬことは当然ですが、それ以外に、あの激烈な入学試験をくぐって入ってきた学生たちが五月の連休前後からいわゆる五月病にかか

る。あるいはこのごろは段落病などと申しまうけれども、大学に入ろうとして一生懸命にやった目標がなくなると、その目標の喪失感から無気力に陥ってしまう。そこに大きな段落ができてしまうので、段落病などと、いわゆるのですが、この五月病なり段落病にかかった学生が、そのままずるずると四年間怠けてしまうという傾向が非常に多いわけなんです。ところがその点については、内部から上ってきた人にはそういう病気が非常に少ない。つまり高校から大学への連続性がありまして、そのため入学後の学習においては外部からの者をしのいでいくのではないかと。これ

は推薦制のメリットを考える場合の一つの有力な材料になるのではないかと考えられますので、経済学部では単に学内の推薦制だけではなく、学外の高校からも推薦制を導入する方向でいま検討しております。

そういった、いい面と同時に他面では、英語などにおいては受験生に比べますと、劣っているということを英語の先生から常に指摘されております。ただし第二語学になりますと、まったく逆でございまして、一般受験生のほうが平均点が例年低い。第二語学については同じスタート・ラインに並んでやるわけですから、段落病人の多い外部からの学生が伸びないということになるのではないでしようか。これは学部によって多少違いがあるかもしれませんが、文学部で何か感じられることがありますか。

天下 文学部の中でも、私の知っているのは、ごく限られた文化史の学生の一部ですし、小野先生がおっしゃったような統計は、文学部にはないと思います。私の専攻には、女子高からこれらの方が非常に多い。私個人の感じでは、このごろは推薦制でくる学生には特に困るとか、グループをつくって他の学

生の邪魔になるというのは、非常に少ないです。ぼく自身は、何人推薦できていただいてもいい。ただ、外から来る学生をほとんど少なくしなければならなくなるというのは、別の面から困るわけですよ。

小野 慶応のアンケートでは、一貫教育を受けてきた人の欠点として、排他的で同族意識が強いという項目がございしますけれども、同志社ではあまりないのではないでしようか。

天下 最初はグループ、友だちをつくっていますから、そう見えるので、排他的な学生というのは少ないでしょうね。女子高の学生が一〇人の中に三、四人いまして、横で見ている限りではわからない。

有賀 英語の力が同志社からくる人がこのごろ低くなったんでしょうか。私は同志社の人はみんな英語はよくできると信じていたんですけど。女子大の音楽の学生も、初期のころはみんな英語がよくできたんです。ところが最近よく落ちるんです。(笑)

天下 一つには目だつんですね。学力がまことに低い何人かがいる。そういうことはありませんか。中学から高校、大学へと当然入

試があればチェックされるところがされないで、もうどうにも英語はにが手だというのがまず何人かはいる。これは仕方ないので眼をつぶるとして、この低くて目立つのをカバーする、目だってできるのがそれほど多くないのかもしれないが。

**高橋** 中学校から来る生徒にはそれ以下の子もいますよ。外部の中学からの生徒は受験勉強していますし、その上四〇人ぐらいしか入りませんからよくできます。しかし三年たつとあまり変わりません。大学の先生方は意識なさり過ぎじゃないですか。私はそのできん子を一生懸命にのばしてやったらいいじゃないかと思う。同志社へはなんでエリートがこなくちゃならないのか。できん子がきても、できん子がきても、一生懸命教育するというのが根底に話がされないといけないと思います。同志社中学からきたほんのわずかの子、数学のできなさはすごいんです。(笑)

**有賀** どうしてでしょう。同志社中学へ入るのにもすごくむずかしいんですよ。

**本宮** 十年ほど前までは数学と英語のために六割強の生徒が家庭教師をつけていた。今はそれが非常に少なくなったのは良いことだ

と思うのですが。

**高橋** 同志社中学出身者の欠点を、同志社中学を批判するだけでよくなるものではなく、それはむしろ高校の敗北となる場合もあります。そこでやっぱりカリキュラムの問題を出して、その指導を同志社中学の先生と話し合う中で進めなくてはうまくならないと思います。

同中出身者は、数学に関して小学校では五か四です。そういう生徒ができなくなっていく。推薦制があるからそれにあぐらをかいて勉強しないという考えが一つあるでしょうね。そういう考えをどこで直していくか、責任を感じるのにはやっぱり高等学校だと思う。そして中学校と話し合いをする。大学の先生も高校へ手を伸べて下さって、指導してゆく。それが具体的な一貫教育だと思うんです。

**小野** いいお話だと思うんですけども、英語に関しては前から学内の先生方で話し合いたいというふんい気はありましたね。

**高橋** シンポジウムが一回あったでしょう。

**小野** だいぶ前にございました。ところがその後それっきりになっているようです。最

近また何かやろうじゃないかという話があるように聞いておりますけれども、いちばんやりやすいパートだろうと思いますね。

**都間** 英語と数学というのはやっぱり積み上げてでしょう。その段階その段階でしっかり身につくところまで締めくくりをやららないで先へ先へ進むからじゃないでしょうか。生徒は利発だから場所を限って試験をするとかよくできるわけです。ところが身につけていないから、上に進んだ場合、もういっぽん基本的なことまで忘れてしまっている。そういうかっこうになっていますね。社会や理科の教科なんかですと、基礎的知識がないからどうにもならないということはないから、あまり問題がでてこないということがありますね。

女子中、高でも、高一、高二になって評価不認定の生徒が出てきたりするのです。どこができないかというと、中学の二年ぐらいの所からあやふやだというのがおったりするわけですね。やるべきところでどういうふうにきちんと身につけさすかということですね。付属なんかでも困っているようです。小学校から入って高校まで行きますでしょう。その上下差があんまり広くなりすぎて。

**高橋** 先般校長会の一貫教育に関する印刷物を見ましたが、こういう程度のことしか校長会が考えていないとしたらかなわんという感じですね。岩倉から国立に入った生徒から次のような手紙をもらいました。

「競争の場の論理を私は持っていない。岩倉では教えられなかったのでびっくりしています。これから自己を守る立場の生活が始まります。ぞっとする冷たさ」。

校長会の案には、明朗で人付き合いがいいとか、社会性があるとか、よい趣味を持っているとかと書いてあるが、これは高い授業料の払える家庭の関係だけでしょう。精神面における長所というのは、同志社では競争の論理はなくて協調の論理があることだと思ふ。有賀先生がおっしゃった人間尊重ですね。

又、短所では排他的で同族意識が強い（三年もたてば解消すると思う）、それから自己中心で要領がよすぎると校長会はいわれるが、公立がどれだけ自己中心で要領がよすぎるか。エリート意識が強い。戦前をご存じですか私は姫路の中学校を出たんですが、同志社、慶応、早稲田等の私立学校をわれわれは大学と呼ばなかった。国立だけが大学で

ある。同志社の生徒はエリート意識が強くて気高いなんて私にはとても考えられない。依存性が強いともかいてあるが、やっぱり経済的余裕のある家庭の子弟が比較的多いのが原因ではないのですか。私は、卒業生をみて依存生が強いとは思えません。

有賀先生の言っているらしいお互いに尊重しあうとは同志社ではある程度生きているんじゃないですか。同志社では政治家が少ないでしょう。いまの政治の中で同志社は出なくともいいとさえぼくは思っているんです。ああいう政治家の中では出られないだろうと思う。同志社人はお人よしであって、役にもたたぬことに力を出すといわれるが、そういう者が生き生きする世代がそのうちにくる。それには日本が二〇〇年かかる、そういう新たな新島先生はえらいと思う。

**有賀** だけど、私は同志社からすぐ優秀な人も出てほしいと思うんですよ。

**高橋** そういう人が同志社から出ていないように思われますか。

**有賀** 出ています。それを同志社の人が認識しないのが残念だと思う。そういう人を大切にしないでしょう。

**高橋** いまのような政治家が同志社から出たらばくは恥ずかしいと思う。

**大下** 同志社に推薦で来た学生と京都大学へ行った学生とが、大学卒業後も友だちで仲よくしているということも聞きますね。やはり国立へ行った卒業生の中にも一貫教育の流れがあるんでしょう。

**高橋** 同大教授のご令息で、岩倉より京大を出、有名会社に入り、トップクラスでアメリカへ行った。その後不幸にも永眠した。すぐ集まったのは高校時代の友人がいちばん多かった。そういうところに同志社のよさがあるんじゃないかと思ひます。

**有賀** 私も学生を見ていますと、音楽では才能のない人というのは一目瞭然でわかるんですけれども、同志社の学生はそういう人をけつして軽蔑しないんです。実力は実力でも人間としてちゃんと尊重するんですね。それが私はいいことだと思うんです。同志社の校風として。

#### よき訓練を

**大下** 先ほど入試のことがありましたけれども、選抜や競争がないこと自体はいいと思

いますよ。けれども、それと一緒に、訓練するといえますか、ディシプリンを与えるというものがなくなっているのは困るわけです。中学から大学まで全部に言えることだと思えますけれども、現状は受験競争だけが唯一のディシプリンを与える機会になってしまっているもので、入学試験の悪い競争をなくして、それにかわるディシプリンを与えるのは非常に困難だと思えます。それをどう実現していくかということが一貫教育の課題だと思えます。

**小野** たとえば岩倉や香里なんかで礼拝のときのふんい気は非常に騒々しいことは私も体験したわけですけれども、ああいった問題はどうですか。つまりディシプリンということが欠けているのではないかと。(笑)

**高橋** 私はあんまり悲観していません。若者があります。毎日毎日礼拝です。そうして説教を聞くんです。うちへ帰るとテレビでいろんな説教を聞いて、先生や両親からも説教です。こんなことを言ったらしかられるかわかりませんけれども、若者だから騒ぐと思っているんですけどね。田畑先生がおっしゃったことですが、話す人がまずいんだよ。それに甘えてはいけないし、さわぐことは悪い

ことです。悪いことは悪いとしてきびしくつけねばなりません。先生のそれに対する怠りもありましょう。

**本宮** 中学で一昨年ですか、朝遅れてきて礼拝堂に入らない者が教室でたむろしていて、わいわいやるんですね。雨が降った日や風邪のはやったときなんかはクラスの二割ぐらいが教室にいることもあり、日直と遅刻者は放送による礼拝をちゃんと守ることになっていたけれども、先生はいちいち監督に回れませんか、そんな状況になっていったんですね。すると、そこでわいわいやっているのが礼拝堂に入ったときでも同じようにわいわいながちだったわけですね。そこでずいぶんと荒手術をやりましてね。遅れてきた者は全部地下食堂に入れ、そこでちゃんと司会者が前に立って礼拝をきちんと守らしたのです。したがって礼拝の時間には学内で自由にしゃべったり騒ぐ者はだれもないという状況をびちっとつくっていったわけです。

礼拝開始五分前までに入室できなかった者も、全部指導して地下食堂に入れて、そこで礼拝を守らした。だから礼拝堂は五分前に締め切りますから、中は非常に整然としてき

て、それ以来、礼拝の時間は厳粛に持たれるものだということが徹底してきました。五分前までに入室できなかった者と、礼欠者は毎日担任に報告され、指導を受けることとなる。この体制は、現生活指導部に発展的に受け継がれ、ますますその効果が定着してきたように思います。これは一昨年からのことですから、高校とも連絡して、中学を卒業していく生徒をその態勢で受け入れていたのだかいたなと思っていますが、まだ充分な連絡ができていません。高橋先生がおっしゃったような、ある程度しかたがない面もあるかもしれませんが、技術的な面で改善できる点もいろいろあると思います。そして朝のあの時点をきちんと守ることによって、学内での規則違反などがぐっと減ってきました。あそこが生徒指導の原点だと思いましたね。

**小野** 中学校は特に大学のキャンパスと一緒になっているの、全人教育の上からみるとあまりよくない感化を受けているのではないかと恐れることがございます。あるいは逆に雑草教育のたくましさと言いますか、反面教師的な形で、かえっていい点もあるのかもしれませんけれども、生徒たちはあの中学の

キャンパスから、大学生をどのように観察しているのでしょうか。

**本宮** 中学生はほとんど影響を受けていませんね。ときどき大学のマイクがやかましくきますので、生徒会や何かで出ますけども、次元が違うというふうに思っていますね。

**高橋** 高校にきている同中出身者に、中学時代大学生と一緒にどうやるときいても、何も影響を感じない。大学生は大学生なんでと。

**小野** なるほど、そんなもんですか。

**高橋** 現在の中学は、あまり関係がないと私は思います。ただ、旧制中学のときにはあったのですよ。五年生がいて予科がありました。あれは影響大でしたね。だから大学と高校は離れていたほうがいい。

**都関** その年代にふさわしい環境を備えるべきだと思いますね。それで女子中、高の場合、教室配置を少し分離して、中学、高校の性格をはっきりさせたほうがいいと思います。やはりそれで高橋先生の言われたように離れながらも距離をもって必要な交流をする。広島女学院の中学、高校がうまくいっているんじゃないかと思えますけれどね。中学と高校がキャンパスをわけて道路を隔てて

ある。あれぐらいの教育条件の整備ということを考えるべきじゃないかと思えますね。

**高橋** 同中と高校は今ぐらい離れていてさえも、同中生に悪影響を与える者があるから理由なく遊びに高校生をよこさないように、との要請が、同中の先生からありました。

**有賀** 中高と女子大とはどうでしょう。女子大のほうのお姉さんがたの悪い影響がいきますかしら。

**都関** 若いときは年令以上に上の真似をしますから。服装なんか女子大生みたいな格好をしたりとか、そういう面で高校生に少しは影響があるでしょうけれど。女子大は出欠や授業をきちっとやっておられるようですから、中、高とあまり雰囲気的に違いませんね。教室の移動のときもさっさと歩いていらっしゃるし。しかし、望むらくは、道路を隔てたぐらいのへだたりが、やはり、あってほしいですね。しかし、学生、生徒の交流はありませぬ。

**有賀** 私のもうちょうと交流してもいいと思うぐらいいで。ことに先生とか教職員同士ね。

**高橋** それはありますね。

**有賀** ほんとうに知らないんです。お互いに。道で会ってもわからないです。

**大下** そのことは大いに強調したいですね。よりよい教育環境ということはあるても、中学生が大学の中に入って、とくに悪影響を受けるということはないでしょうね。いつでしたか、教授会でお達しがあるというので何かと思いましたら、大学生が横断歩道を渡らないので、中学生が悪いまねをして困ると、中学からご注意があったということなのです。私はおとなというものはこんなに悪いもんだからということをもむしろ教えるほうが……(笑)。世の中が悪ければすべて私に責任はないというこのごろの風潮でございましてむしろ反面教師を使って子どもに自主性を教えるのがいいと思って聞いておりました。

**本宮** それは已然じになったらわかると思いますが、中学生はだいたいにおいて横断歩道をバスを降りてコの字型に渡ってきますね。昼休みなどはときどき大きな大学生の影にかくれてまっすぐに渡るのがあるんですね。あれは大学生がやっているからまねするというよりも、ああいう子はどこにも少しはおるものです。しかしだいたいにおいてき

ちゃんと守っていますからね。あれは大学生の影響だとは思わないんです。

私の発言は、中学を岩倉に移転という話があつて、それに予防線を張っているんだろうとおとりになるかも知れませんが、私はまったくそういうことはまったく無関係ですから、そういうことはまったく無関係ですから、その点は色めがねをかけないで素直に受け取っていただいていいと思います。

それからさきほどの話にも関連するんですけれども、大学の水泳部で、岸田敏馬大先輩がいつか水泳部の学生を集めて『おまえたちは新島精神とかキリスト教精神とか、むつかしいことを聞いてわからんかしらんが、わかる方法がある。それは一生懸命水泳に打ち込むことだ。これを一生懸命やったら自然にわかつてくる』と言つて部員を激励しておられたが、水泳部の五十年記念の集会をするときにも、牧師を呼んできて礼拝形式できちんとなさいましたし、そういう面に非常に協力的ですね。やっぱりああいうクラブ活動を通じて一種の同志社人的な人格に近づくということは確かにあると思います。だから私は、ああいうクラブ活動などは、だいいじな教

育の一環だと思つてんです。

#### 学内交流の促進を

小野 では、最後に具体的な提案などございせんか。

高橋 具体的なものとして百周年記念事業委員会の中に第一部会というのがありましたね。ぼくはあれに非常に期待を持っていたんですが、北垣先生がアメリカへ行かれた後、しり切れとんぼになったんです。

有賀 人間教育小委員会ですか。

小野 私がちょっと外国へ行った間にどうなったのか、結論は聞いていないのですが。

高橋 各学校の宗教教育の実情を神学部長に報告して、終わり。がっかりした。そして解任しますという通知がきました。(笑)

小野 まさに総論だけですね。

天下 さっきおっしゃったように、やっぱりいろいろな形でもつと交流ができないといけませんね。むだな誤解もあるでしょうし。それをなくすということが、まず必要でしょう。正直なことを言えば、いまの高校生を教育してみなさいと言われたら、だれもできないほどむづかしい世界的な問題を抱えている

わけです。そういう高校生にも何らかの形で触れるということが、大学に在るものにも必要でしょう。私たち、推薦時の進学指導がわるいとよくいいますが、高三の年令の子どもに本気でどの学問がむいているかを聞かれて、自信をもつて答えられる大学の先生は、ほとんどないでしょう。私だって男の子に歴史が少し好きだから文化史専攻にしようと言われたら、就職がむづかしいから考えなおせと言いますよ。現状を見ないで一貫教育の議論をやっていますと、非常に抽象的で勝手な議論になりますね。

小野 交流と言えば校長さんたちは校長会なんかで交流しておられるわけでしょう。それ以外の交流のあり方というのは実際にはほとんどないんですか。科目ごとに、たとえば数学なら数学で女子高の数学の先生と岩倉の先生とが話し合うとか。

高橋 数学科としては同中とやっています、女子高校とはまだ。

都問 同志社内の地理担当教員の研究会がありますね。

小野 それから同志社の宗教教育について、中学から大学までの宗教教育に責任を持

っているような人たちがフランクに話し合えるような機会が必要なんじゃないかと思うんですが、実際上はどうでしょうか。

**都間** ずっと以前、大学の先生で、高校の社会科を持ちたいと言われた方がありましたけどね。

**高橋** 同志社高校では昭和二十六年ぐらいまでは講師はほとんど同志社大学の先生でした。よかったですよ、やっぱり。

**小野** きょうの座談会はどうしても総論的にならざるをえないんですけれども、これを各論的に、たとえば英語の先生だけを各校から集まってもらって座談会をやっていたかどうか、さらに科学教育ということで集まっていたかどうかというようにして個別にもう少しやったほうがいいですね。

**大下** 校長会メンバーの先生方も、どこか一週間ぐらいのんびり温泉で腹を割って話し合うというぐらいのことができれば、少しは効果があるのじゃないかと思いますがね。

**高橋** 去年の年末でしたか、同志社大学の宗教部が主催して宗教教育研究会をなさったときに、中高側も出席させて下さいましたよかったです。

**都間** 上から下ということが少ないです。大学の先生が高校へとか、高校の先生が中学へ行くとかそういう交流があると、もっと円滑にいくということがありますね。

**本宮** 大学と中、高もあれですけども、同じ中、高同士の交流があってもいいですね。前に、岩倉とありましたね。私はこうして三年間手塩にかけて育てた生徒を岩倉へ送っちゃって、どんなになっているのか全然わからなくていろいろ思ったことがあります。だが、岩倉の先生方が毎年順ぐりに来ていたでいて、だいふ風通しがよくなって、大変よかったですね。だから、香里や女子中との交流もあればいいと思いますね。

それから、チャペルに大学の先生やいろんな方に来ていただいて、いままで言われたような、中学から来た者のよい面や悪い面などを、大学や高校の先生の目でとらえられたことなどをどんどんとおっしゃっていただいたら、生徒も一貫教育をはだで感じて生き生きとすることだと思います。いままでもときどき来ていただいているのですけれども、少なくとも一週間に一ぺんはどなたかが来ていただければいいんじゃないかなと思います。

**大下** これはなかなか実現がむづかしいでしょうけれども、女子大と大学との学生の交流が、ぼつぼつ考えられてもいい。少なくとも大学院レベルでは、学生が自由に単位をとりにいけるようになっていいんじゃないですか。女子教育という問題もあるでしょうけれども、ハーヴァードと女子大のラドクリフの関係のようになれば理想です。先生方は、学生が家庭教師でもらう半分にもならない増担料で交流していますけれども。

**小野** 日本の社会は縦割りの社会だと言われておりますけれども、いっぺん組織ができてしましますと、なかなか横のつながりができにくいという欠陥があるわけですが、こういうことを機に、もっと横の連絡を密にしていきたい、またいかなければならないと痛切に感ずるわけでございます。一貫教育という問題は、議論のために議論することはできるけれども、実際にそれを具体的な行動のプログラムに積み上げていくのはなかなかむづかしい面もございますけれども、きょう集まっていたいただきました先生方は、今後の教育の中で生かしていただきますよう、ご協力を願いたいと存じます。(一九七六年五月二十日)